

第十六章 思わざる転換

池田政権が四度目の正月を迎えた昭和三十九年の初めは、池田首相の周辺に疲労感がただよっていた。政権の重みが、それを支える側近グループに一種のひび割れ状態を作りだしていたのである。

まず、政権の大黒柱であった前尾幹事長が党内のゴタゴタの処理のためすっかり健康を害し、病院から党に通って執務するという状態となった。大平外相は、公務に追われていて、どうしても官邸や信濃町に足が遠のきがちになり、池田、大平間の意思の疎通が欠けがちになったことが、側近内部の亀裂を拡げた。

そのうちに、池田首相の耳に、大平が池田に対して謀叛を起こそうとしているという風評が入る。噂のものは、大平が宏池会の若手国会議員に若干の活動資金を渡したことで、大平が宏池会の台所をあずかっていたという従来立場から言えば問題になることはなかったが、それが歪曲されて池田に伝えられたのである。

池田は大平を呼んで、「言いたくないから黙っていたが、お前は新しい派閥をつくるそうじゃないか」と糾問した。

大平はぎょっとして、「そんなことを考えているわけではありません。小遣いをくれというから、あなたにかわって手当てをしただけです。これまでもそうしてきたじゃないですか。いちいちあなたの裁量を仰がなくてもいいではないですか」と言った。

池田は、「それがいかん、それがいかん」と激怒し、大平は一時、池田邸に出入りできなくなった。

こうしたことになるってしまった背景には、総裁三選をめぐる池田と大平の考え方のちがいがあつた。池田首相は、これまで自分が推進してきた高度成長政策に確固たる自信を深めると同時に、その間に次第に露わになつてきた成長に伴つたズミを正しつつ教育の充実を中心とした人づくり政策を実施し、それによつて池田政治を完成しようという考えを持つにいたつていた。これに対して大平は、池田政権実現のさいに佐藤から協力を得たという関係もあり、池田がむやみに突っ走ろうとすることに強い懸念を覚えていた。彼は当時、周辺のものにしきりに、「総理は強氣一点ばりだが、困つたものだ」ともらした。おそらく池田首相は大平が池田三選に消極的であることを感じて、内心イライラしていたのである。それやこれやが重なつて、あれほど緊密だつた池田と大平の間に、このとき一抹の隙間風が吹いたのである。

大磯の吉田元首相は、池田が二期つとめたあとには佐藤と考えていたと言われる。これを察した池田は、箱根への行き帰りにには必ず立ち寄つていた吉田のもとから、足を遠ざけた。佐藤のライバルの河野は、佐藤を牽制する意味で、池田に立てという。五月十八日には、佐藤が箱根で静養中の池田に話を申し込むが、池田はこれを拒否し、通常国会終了直後の佐藤、藤山両者の辞表提出で、夏の臨時党大会（七月十日）での総裁公選は決定的となつた。

池田が「何としても俺はやる。一発で（勝負を）決めてやる」と決意を表明したあと、大平は親しい記者に「ボクは（三選に）賛成じゃないのだけれど、ご本人がやるといつて以上、やらなければならぬ。しかし、高い切符だよな」と嘆いた。それでも大平は、「ご本人がやるという以上」ということで、大詰めの段階では財界工作などに動き出した。だが、彼はもはや五年前のような主力部隊の中心的存在ではなかつた。

総裁公選は決まつたが、池田支持陣営の河野、三木、川島、旧大野の各派の中には、密かに対立候補の佐藤を支持するいわゆる「忍者部隊」もいて、争いは「ニッカ、サントリー、オールドパー」などという隠語が飛び出す乱戦となつた。「ニッカ」とは二派から、「サントリー」とは三派からそれぞれ資金を受け取つた人物を言い、「オールドパー」とは、各派から受け取りながら誰にも入れずパーにした人物のことを言つただけである。

池田は一発で決める。つまり、一回目の投票で過半数を二十数票上回つて勝つ、と強氣だつた。対抗する佐藤陣営

も「十票は勝てる」と読んだが、公選の結果は、投票総数四百七十八（うち無効三）、池田勇人二百四十二、佐藤栄作百六十、藤山愛一郎七十二、灘尾弘吉一で、池田票は対抗出馬の佐藤票と藤山票を合わせたものをわずかに十票上回っただけ。過半数を超えることわずか四票にすぎなかった。池田は「あぶなかったなあ」とつぶやき、もはや自分の時代が終わりつつあることを悟ったが、池田支持の長老松村謙三は、「一輪咲いても花は花」と池田をなぐさめた。

三選された池田総裁はただちに改造人事に着手したが、激しい総裁公選のあとだけに、構想はなかなかまとまらなかった。

前尾幹事長が健康上の理由から辞意を表明したので、まず幹事長人事が焦点となった。池田政権の幹事長は、はじめが長老の益谷秀次、ついで前尾で、いずれも池田派からの起用である。大平は、池田内閣の功労者として、当然、幹事長のポストを期待していたが、前尾は、「大平君はもう一度苦労しなければいけない」と言い、後任に「党近代化・派閥解消に関する答申」を提出していた三木政調会長を推した。池田首相としては、「自分はこれから二年間総裁をつとめる。三木には一年だけやらせればよい」という考えがあったと言われる。池田は大平を退けて、三木を幹事長に任命した。

結局、党関係は、川島副総裁、三木幹事長、中村（梅吉）総務会長、周東（英雄）政調会長が決まり、閣僚については、河野建設相を副総理格の国務大臣とし、田中蔵相、赤城農相を留めたのみで、閣僚はすべて更迭された。この人事において、鈴木善幸前筆頭副幹事長が官房長官に抜擢された。旧秘書官グループの大平外相、宮沢経済企画庁長官、黒金官房長官はいずれも閣外に出た。幹事長の椅子を逸した大平は、筆頭副幹事長として三木幹事長を補佐することになった。

大平は記者会見で筆頭副幹事長就任のさいの抱負を聞かれたのに対し、「はじめての党務でひとしお気持を新たにしている。党務は行政とは異なり、可能性を求めることで、まさにそれ自体が芸術だ」と述べた。大蔵省の大先輩である賀屋興宣（元蔵相）からは、「がや会」の席上、「君はえらい。よく（このポストを）静かに受け入れ、不満もいわずにつとめているね」とほめられた。

だが、ここで大平が幹事長のポストを逸したことは、その後の彼の政治生活の動向を大きく左右し、大平政権の実現ま

でに、長くつらい道を歩ませることとなった。政界出馬以来、上昇気流に乗ってきた大平のコースは、屈折の道に入ったのである。

こうした大平の不運に追いかぶせるように見舞ったのが、長男正樹の悲惨な死であった。池田の総裁三選後問もない八月六日のことである。大平にとって、「生くる希望と情熱を失いかけた」（『春風秋雨』）この出来事を詳述するのは、次章に委ねることにしよう。

辛うじて三選に成功した池田首相が声の腫れるのを感じたのは、昭和三十八年十月の総選挙の途中からである。もともとガラガラ声の持主だったから、遊説で声をからしても、本人も周辺も格別気にはせず、ウガイと塗り薬でこまかしていたが、咽喉の痛みはいつになっても消えない。

三選後のある日、秘書官たちとの会食のあと出たカンテンを食べながら池田は、「これは咽喉をつるりとすべって気持がよい」と言った。「これはおかしい」と感じた周囲の人々のすすめで、精密検査が行われることになった。

東大耳鼻咽喉科の佐藤教授、がんセンターの比企総長、慈恵大の佐藤教授の意見はただちに一致した。まぎれもない喉頭ガンの症状である。たまたま大平夫人の親戚の主治医で以前から大平と面識があった比企は、その夜、大平邸に電話をかけてきた。

「どうもガンのようです。なるべく早く入院して、治療してもらわなければなりません」

平素沈着な大平副幹事長も棒でたたかれたような衝撃に襲われたが、本人、家族はもちろん、世間に言うわけにはいかない。取りあえず前尾と相談の上、大平は池田首相に対して、「このままでは咽喉の軟骨が腐蝕するおそれがあるので、放射線治療が必要です。その設備が東大病院にはないから、がんセンターに入っていたただかなくてはならない」と進言した。池田は九月七日ホテルオークラにおけるIMF総会の演説をすませ、九日夜、入院した。

大平はその時の心境をこう綴っている。

「これはえらいことになった、というのが、私ども側近の偽らない感懐であった。そして、その瞬間、われわれはお互いに言葉には出さなかつたけれども、政権の閉幕という大きい課題を意識していたのである。池田さんの心中は窺知するよしもなかつたけれども、表面は極めて平静で快く入院にも応じてくれた。」(『春風秋雨』)

この時から、池田周辺では、人には知らせられない苦労がはじまった。

前尾や大平が最も心を痛めたのは、首相の入院と病状を世間にどう説明するかであった。ガンであることを明らかにすれば新聞に出るし、新聞に出れば本人が知る。政局は大きく動揺し、折から始まるつとしていた東京オリンピックに暗いカゲを投げかけることになるだろう。そこで、前尾と大平は密かにがんセンターの比企総長、久留院長と会い、「ガンであることは絶対に秘密にしてウソを言ってもらいたい。それは医師の良心に反するであろうが、他日、必ず国民にお詫びをするから」と要請した。こうして九月二十五日、首相の病状は『前ガン状態』であるという発表が行われたのである。

前ガン状態　ガンではないが、ガンに移行するおそれのあるもの　という発表は、極めて微妙なものだったが、党内には比較的穏やかに受けとられた。政変にはつながるまいという見通しのためである。しかし、『政権の閉幕』を意図した大平副幹事長らの水面下の動きは、にわかに忙しさを加えた。大平は、発表が行われる四日前の九月二十一日、胃潰瘍手術後の静養のため軽井沢に滞在中の三木幹事長のもとへ電話をかけ、帰京を求めた。

大平は毎日のように三木、前尾と連絡をとり合った。

三木の回想によれば、

「池田さんの病室は高速道路一つを隔てて新橋の料亭と対面していた。私はその新橋側で、大平君と時々会って、善後策を協議した。病院に詰めている大平君を呼び出して会うのに一番手近な場所だったからである。

だが、大平君と相談しているながらも、ついそこに池田さんが自分は気がつかないで『死の淵』にいる。そしてここでは大平君と私が池田さんの引退を協議している。ふとそんな現実気が付いて、私は何ともいえぬ無常感に襲われるのであった。」(『池田勇人先生を偲ぶ』)

放射線治療が進んで、痛みは和らぎ、池田首相は毎日をもてあましている様子だったが、病状は決して好転したわけはなかった。ただ、十月十日からのオリンピックを控え、世間の関心がそちらに集中していたのが幸いと言えれば言えた。しかし、大平は、世間が首相の進退に関心を向けてくることを想定していた。

「事態は一見、平静に推移するように見えた。……しかし、現職の総理が入院加療中であるという敵たる事実は隠れもない現実であった。総理が現に担われておる内外にわたる重い責任は、逃れることはできなかった。従って、世間の同情と寛容にもおのずから限度があるはずである。われわれ側近の焦慮は、環境の平静に反比例して日増しに増高してゆくのみであった。大きい決断が要請されていたのだ。」(『春風秋雨』)

自分がガンであることに気付いていない総理大臣に退陣を求める手順ほどむずかしいものはないであろう。前尾、大平の二人は知恵をしばって、オリンピック終了の翌日の日曜日、十月二十五日に退陣を表明する段取りを決めた。したがって、それ以前の十月十六日から二十日ごろまでの間に、本人に辞任の決意を固めてもらわなければならない。

十月十日のオリンピック開会式に池田首相は満枝夫人とともに出席したが、それから数日後、比企総長から十一月の臨時国会はもちろん、翌年の通常国会も出席はムリで、オリンピック直後におやめになっては、という勧告が行われた。

池田は「死ぬ気でやったら辞めなくてもいいのではないか」と言ったが、総長が「医師としてそんなことはおすすめてきない」と答えると、池田は「一体、誰がこの話を仕組んだのだ」とたずねた。総長が「前尾さんと大平さんです。他の人は何も知らされていないようです」と言つと、「そうか、あの二人ならまかせることにしてしよう」とあっさり決断し、十月二十日に退陣の覚悟を固めた。

この頃のことであるが、大平副幹事長がまとめたメモが遺されている。退陣表明の二十五日と二十六日の段取りを記したくだりは、傍線が入ったり、印、×印があったりして、あわただしい当時の雰囲気を感じているが、二十五日に発表される予定の決意表明の文案の方は、五項目にわたって大平の筆蹟できっちりまとめられている。

まず段取りについては、

「十月二十五日 病状総合診断発表。川島、三木、河野、鈴木招致（決意表明、副総理おくかどうか、総理談話打合）首相
相

談話発表

十月二十六日 十時役員会 四役、幹事長、処理方針、正午緊急役員会

とあり、「十時」のくだりに横から線を引いて、「臨時閣議 後任総理が決まるまで政務に停滞を来たさない。事態の收拾に一致協力する」と記されている。

また、「処理方針」と書いてある横には、「話し合いで後任総裁をきめる 話し合いは川島、三木が主導的役割りを果たす 当分現体制でいく」と書かれ、川島の名前の前に、あとから「河野」の二文字が挿入されたり、×印で消されたりしている。「機関中心主義で役員会、総務会、両院顧問会、相談役会の議を経て、最終的に議員総会でしめくくる」と書いてあったり、の横に二重丸で「一任」と記されてあったりするのは、多分「池田首相一任」を意味しているものである。

決意表明の要旨は、入院以来、鋭意治療に努めているが、今日まで、一応順調に行っておる。しかし、激務に耐え得るまでには尚五カ月の期間がかかる。一方、国際情勢は目まぐるしい転移をみている。内には臨時国会、予算編成、通常国会を控え、このような健康状態では政務を見ることは許されない。ついては、この際、自分が辞職して後任の総裁を選び、新党首の下で挙党一致して内外の時局に雄渾に対処してもらいたい、自分の辞意を諒とせられ、副総裁、幹事長が中心となって、新党首選任に特段の御苦勞をお願いしたい、できれば新党首は話し合いで選び、かつ党及び政府の現体制の改編は極力これを選び、事態の穩健、円満、迅速な処理が望ましい となっている。

二十五日、実際に発表された首相談話では、のくだりが盛られていないが、これは党内的な手順に関するもので、池田首相の申し送りの要望の色合いが濃いために見送られたからである。結局、談話の最終的な形は、「私は入院以来、一カ月余りを経たず、医師はなおしばらくの療養を求めています。私は首相の地位を辞任することを決意し」から始まり、

「足らざるどころの多かつた私に支援と鞭撻を惜しまなかつた国民各位に感謝の意を表します」に終わるものになった。この日の状況について大平はこう記している。

「当日午後一時、池田さんは政府側から河野国務相、鈴木官房長官、党側から川島副総裁と三木幹事長、それに私を同時に病院に招き、入院以来今日まで迷惑をかけたにわからず、心のこもった協力をいただいたことに謝意を表し、政治の空白と動揺を避けるため、自分は退陣の決意をしたことを静かに告げられた。そして川島、三木両氏を中心とする執行部の手によって、一日も速やかにかつ話し合いによって、円満に後継首班を詮衡されるよう求めた。同時に政府側もこの執行部の仕事に十分協力されるよう要請され、一同も快くこれを諒承した。」(『風春秋雨』)

こうして昭和三十五年七月に安保騒動後の政局收拾の中で発足した池田政権は、昭和三十九年十月、事実上、その幕を閉じることとなった。

この四年三月月あまりの間に、池田政治が戦後史の中で果たした役割は何であつたか。言うまでもなく、その第一は、安保騒動で荒れ果てた人心を、所得倍增政策を掲げることによって急速に鎮静させ、国民のエネルギーを吸いあげて、今日の日本の繁栄の基礎を築いたことにあるであろう。経済成長率は、昭和三十七年度こそ五・七%と予想に達しなかつたが、三十六年度十四・四%、三十八年度には十二・九%と大幅に計画値を上回り、十一年計画は七年間で達成された。この成長ぶりは、当初は所得倍增計画に疑念を抱いていた国民をも大いに勇気づけ、自分たちの生活向上のために惜しみない努力を行う国民資質を開発し、これを大きく展開させた。これによって日本は、つづく佐藤政権の時代に、GNPで米、西独について自由世界第三位、さらに第二位と、国際社会に動かすべからざる地歩を獲得した。

経済のこうした飛躍的な発展は一人の政治家、もしくは一つの政策によつてのみもたらされたものではない。とりわけ忘れてならないのは、戦後、長老財界人の追放によつて登場してきた新しい経営者層の活躍である。彼らは、池田内閣出現までに十年余の経験を経て、円熟の時期にさしかかつていた。池田を中心とした政治家・官僚群とこの経営者群は共通

の世代経験をなかたちとして、緊密に結びあい、折から世界に渦巻いていた技術革新の波を、旧套に固執することなく進んでつかみとつたのである。国民は、理想を現実化するダイナミズムに強く魅きつけられ、野党を中心とした諸勢力の称えるカサカサした観念論から、次第に離反して行った。

政、官、財界、そして労働界をも結集したいわゆる日本型経営が広く定着したのもこの時であった。それは、地縁や血縁による結びつきを離脱しつつあった国民に与えられた新たなコミュニティであり、だからこそ、人々にとって求心力を持ちえたのであった。

だが、急激な変化にはさまざまな副作用が伴つのは当然である。とりわけ、産業や人口の都市集中化、それによつてもたらされた核家族化は、それまでの国民の価値観を大きく変化させ、これに伴う疎外現象が社会のあちこちに見られるようになつた。

池田は、経済成長が所得倍増政策によつて達成されたのと同じように、これらの問題が何らかの政策によつて解決されるべきものと考えたのである。彼は、人づくり政策を三選のスローガンとし、そのための膨大な審議会を発足させた。だが、池田自身によつて、「人づくり」がどのようなものであるべきかについてのビジョンは、所得倍増を打ち出したときほどの明確なものがなく、人々の強い関心を惹きつけることもできなかった。

大平は、多分、そのことに氣付いていたのである。『春風秋雨』にこう書いている。

「政権の座につくよりは、それから去る事の方がより難しいものであるが、往々にしてそのチャンスは掴み難いものであることも、折に触れ、われわれは語り合つておつたことである。然るに天は池田さんに幸いして「病氣」というチャンスをお恵まれ、政権の座を去る契機をもたらすとともに、一個の庶民としての自由な境涯の門戸を開いてくれた。……その（退陣声明の）瞬間から池田さんの表情は明るくなり、拳措も軽やかになられ、食欲も進まれたようであつた。」

池田首相の引退発表によつて、政局は、後継総裁選の渦の中に入ることになった。当時、有力候補と党内外で認

られていたのは、佐藤栄作、河野一郎、藤山愛一郎の三人である。この頃の状態では、池田が後継者を決めぬまま政権を投げ出してしまうと、党内は勢力を三分して三カ月前の総裁公選を上回る大混乱におちいる可能性が強かった。

池田は、大平メモにもとづき、昭和三十九年十月二十五日に退陣の意思表示をしたが、そのさい、川島副総裁、三木幹事長に対し、「一日も速やかに、かつ話し合いによって円満に後継首班を選考してほしい」と要請した。これに対し三木幹事長は「イギリス保守党の最近の政権交代　つまり病気のため辞職したマクミランからヒュームへの例　にならうて、総裁たる池田さんが指名して決めるのがよい」と答え、川島副総裁もこれに賛同して、川島・三木調整工作　池田首相による後継指名、という方向がたまった。

こうして、十月二十五日からゴールの翌月九日まで、二週間にわたる緊張の連続した日々が始まった。

大平は、次のように記している。

「主役は川島正次郎・三木武夫の両氏であった。私の仕事は、池田さんと川島・三木両氏との間の連絡接着のことであった。……この工作があくまで……執行部の手によって、しかもその手によってのみ行われることを保証すること……が、党の統一を守り、政治に対する信念に応える道である……もし、そのことに失敗すれば、がんセンターに在る病首相みずからが工作の矢面に立たなければならなくなり、それは彼の生命までも奪うてあるうことをおそれた……。」(『春風秋雨』)有力候補の佐藤、河野、藤山の三陣営はそれぞれ「われこそは最有力で、池田首相は必ず自分を指名するに違いない」と主張して名乗りをあげ、二十六日以降、調整役の川島・三木および池田主流派に対して、活発な働きかけを開始した。三陣営それぞれの主張の根拠は、おおむね次のようである。

まず、佐藤陣営は、池田首相との共通の「恩師」である吉田元首相の意向が大きく影響することを期待していた。また五高以来の池田との個人的なつながりも無視できなかった。それに、何といても三カ月前の総裁公選で、第二位として池田に迫ったという実績があった。財界の多くも、それらを認めて佐藤を強く支持していた。

河野陣営は、池田政権の後半は全面的に協力し、池田三選にさいして、大いに貢献していたし、池田自身、それを高く評価し、感謝の意向を表明していた。調整役の川島・三木がともに党人であることも、河野に幸いすると見られた。とくに川島は佐藤を好まず、河野に好意を抱いていた。

藤山陣営は、これまで、池田政権に全面的に協力してきたわけではないが、総裁公選以降の池田対佐藤の対立は根深く、また河野対佐藤の対立も深刻で、いわば漁夫の利を占める可能性に賭けることができた。

そのうちに、こつした三陣営の思惑とは別に、いわゆる総裁候補を持たぬ中間派 川島、三木、旧大野、池田の四派が結束して、三候補の中から誰かを支持してはどうか、という動きが出はじめた。池田派内部は、一時は、前尾らが藤山政権を真剣に検討したり、高橋等らが反佐藤的言動を行ったりして、かなりの動揺を示した。

佐藤陣営からはさまざまなパイプを通じて、池田とその周辺、川島・三木両調整役に対する働きかけが行われた。恩師 吉田元首相は大磯からしばしば上京して、池田派幹部に対してはもとより、両調整役に対しても「佐藤後継」をつなごうとしたし、池田、佐藤の五高以来の友人たちも両者の間を往復した。両者と親しい多くの財界人も、池田から佐藤への円満な政権交代こそが保守安定政権の継続」と主張した。

興味深いのは、佐藤派の幹部ながら大平とは長年の盟友である田中角栄が、直接、首相の病室に乗り込んで話合いを行い、大平に対して繰り返し「佐藤後継」を実現するよう働きかけたことである。田中は、池田ががんセンターに入院して間もない日曜日、池田の病室を訪れた。

「池田さんは」私ががんセンターの病室に着くと「ちょっと前に河野一郎君が見舞ってくれて、今帰ったよ」とボツリと一日、言っただけ私の顔をじっと見つめられた……。後任は誰にするんだ」とまた一言ボツリ。……私は池田総理の目を直視しながら「それは佐藤栄作だ」と一言、明確に言った。

……池田総理も私の目をじっと見ながら、ただ一言「うん」と言っただけ横になられた。……（私は）「このことは大平君にだけは伝えておいて下さい」と一言述べて席を立つた。「『回想録』追想編」

大平自身も田中からの働きかけについて次のように述べている。

「田中君から佐藤さん擁立のお話、強い要請があつたことは事実です。それで私は『こういう問題はちゃんとしておいてくれ。へたな動きはせんでくれ。天下、おさまるところへ、おさめていかにやいかんで、佐藤派が佐藤を擁立したいという気持ちはわかるけど、乞い願わくは派手な動きは慎しんでくれ』と田中君にお願ひしたんです……（田中君も）わかつたということで、その後、私の見るかぎり佐藤派の動きは非常に自重していたと思う。」（自由民主党編『戦後政治の実像』）

大平としては、『多数派工作などをやつて党内に混乱をまき起こすことがなければ、大勢は落ちつくところに落ちつく』、つまり佐藤が指名されると考えていたのである。

一方、佐藤陣営と対立していた河野、藤山両陣営の動きは、佐藤陣営とは対照的に表面的には極めて活発であつた。十一月四日には、『河野・藤山盟約書』なるものができて、いずれが総裁に選出されても、協力しあう旨が取り決められた。藤山が強気になつた契機は、池田から「あとのことは君もじっくり考えてやつてもらいたい」と言われて手を握られたからでもあるが、何よりも池田首相の盟友の前尾前幹事長が藤山支持の意向を見せたからである。前尾は、藤山の『回想録』の編集記者のインタビューに答えて、次のように語っている。

「党内は佐藤でも河野でも分裂する危険があつた。池田首相が病院に三木幹事長、大平副幹事長を呼んで、『藤山ということも考えてくれ』と話した。それは私の考えでもあつた。藤山さんをたてて、私たちが全面的に押していかなければいかんと考えていた。河野さんは憎まれ役的などころがあるし、財界にもあまり評判がよくない。藤山一本化工作はそう具体的なものではなかつたが、空気として河野があくまでやるというのなら、河野派以外の人は河野より藤山の方が安心だと考えたのではないか。」

川島・三木調整工作の進行過程で、佐藤派に対して強く自重を求めていたウラの演出家である大平副幹事長にとつて、河野・藤山連携の動きが具体化することは、全くの計算外であつたらしい。当時、ある記者が大平に、「いま前尾さんが何

をしているか知っていますが、藤山をかつきだそうとしているんですよ」と話したところ、大平は、「ほんとか、君」と言
って、持っていた箸をパツと落とした、という。

このエピソードでもわかるとおり、池田派内部にはもはや意思の統一はなく、各自がてんでんバラバラに走り回ってい
た。

大平は、ただちに前尾前幹事長のもとを訪れ、「池田さんが川島・三木執行部に（調整を）頼んだのだから、池田派はあ
くまでこの調整を静かに待っているという態度で終始してもらいたい。したがって一切の動きをやめてください」と
要請した。同時に、大平は、河野派の事務所をも訪問して、團田真、重政誠之ら同派幹部に対し、「河野、佐藤の二つの勢
力が一つの安定した組合せになった上に日本の政治はある。楢円形の二つの中心がちゃんとしていることが大事だ。聞く
ところによると、あなたの方の方は藤山さんとの話合いで中心の座をおりるのおりないのはいかがなものか、少し
無邪気すぎるのじゃないか」と連携の動きをいましてしている。大平からみれば、河野・藤山連携工作は一種の多数派工作
であり、佐藤陣営の多数派工作をいましていけると同様、調整工作上、好ましい動きではない、と判断していたのである。

この調整工作の間、がんセンターの池田首相の病室に自由に入れるのは、政府側から鈴木善幸官房長官、党側から大平
副幹事長の二人だけだった。大平は毎日、一、三時間は病室にあつて、首相の四方山話の相手をした。

「私は毎日、まず総理の顔をみて、体の様子や精神的な安定があるかどうか、だれが訪ねて来たか、だれから電話があつ
たか、どういふ状況で総理がいるかという点をいちいち見た。それから川島・三木両調整役の動きを報告した。だから私
は非常に客観的な立場に立っていた。従つて池田さんと私の間においては、固有名詞は全然出ていません。このことは神
に誓つていえます。」（自由民主党編『戦後政治の実像』）

大平は後継候補としての特定の固有名詞がうんぬんされたことはなかったとしているが、自重を求められながらも気を
もんでいた佐藤陣営の田中角栄は、再三にわたり大平に対してアプローチを行った。

田中の回想によれば状況はこうである。「溜池の佐藤事務所に行く」と佐藤さんが一人で待っていた。扉は閉め切られており、佐藤さんの顔が相当硬い表情に見えた。「間違いないだろうネ」と一言。間違うはずはない」と私は答えた。

「大平君に念を押してくれ」と言う声に私は卓上の受話器をとって栄家に電話して、そこにいる筈の大平君を呼んで貰った。失礼なことだが、佐藤さんが今、君に変わったことはないか電話で念を押してくれと言われてね」と言う私に、電話口の声は明確に「変わったことはまったくない」と答えた。私は、佐藤さんに「あなたが直接、電話口に出ますか」と念を押したところ「構だ」と言いながら窓際の方へ歩いていったので、私は「失礼した。いずれ」と言って受話器を置いた。」

『回想録』追想編)

川島・三木両調整役は、船田中衆議院議長、重宗雄三参議院議長を皮切りに、党長老、党内各機関の正副会長、当選一、二回の若手議員の意見を聞いたほか、大詰めには後継候補の佐藤、河野、藤山の三人と個別会談を開くなど積極的な動きをみせた。ほとんどの長老は、両調整役の訪問に対し「総裁一任」と答えたが、石橋元首相だけは「佐藤君が適当」と答えて注目された。

ゴールの十一月九日が刻々近づいた。前日の八日夜、両調整役は候補の三人をパレスホテルに招き、「われわれ二人に任せてほしい。後継総裁が誰に決まっても拳党体制で臨んでほしい」との確認をとりつけた。

その頃病室では、大平が池田首相に「あしたはいよいよご指名の日ですね。明朝、川島さんと三木さんとわれわれ二人(大平、鈴木)がここに参ります。ご指名をいただかないといけません」と話していた。

大平が川島・三木両調整役はおそらくこういう報告をするだろうと言うと、池田首相は「それは君、一本化されていないじゃないか。困るね。オレは一本化してこいと頼んだのだ」と言う。そこで大平は「いえ、立派に一本化されていますよ。最後に総裁にお決めいただく、ということにちゃんと締めくりがついているじゃありませんか、これで一致しているんだから立派に一本化されています。ご心配ありません」と言って、病室を出た。

その夜、大平は自ら筆をとって、翌朝、池田が書き込む固有名詞のくだりだけをあげ、私は後継総裁に 君を

推薦します」という指名の原文をしたためた。

指名当日の十一月九日、午前七時に川島・三木両調整役が病室に入った。大平副幹事長と鈴木官房長官が同席した病室で、両調整役は池田首相に調整工作の経過を簡潔に報告した。川島と三木はいずれも大勢が佐藤支持であることを述べたあと、「総裁のご指名を待ちます」としめくくった。池田は「河野君には気の毒だが、佐藤君が後継者としては妥当だ」と語り、大平副幹事長の用意した一文に太い字で「佐藤栄作」と書き入れた。午前七時二十分すぎである。

佐藤新総裁を決める両院議員総会の午前十時の開会に間にあつよう、川島、三木、大平、鈴木、鈴木の四人は九時に病院を出ることとし、それまでの間、池田首相を囲みながら政治抜きで雑談に時間をつぶした。この時、大平副幹事長が最も心配したのは、指名されなかった河野、藤山両陣営が、両院議員総会と首班指名のための午後一時からの衆議院本会議でどのような反応を示すかであったが、十時前に党本部の玄関で出会った河野派幹部の森清は、大平の顔をみるなり、「いやあ、負けました。快く協力しますよ。われわれ全員、本会議に出て首班指名には投票しますよ」と話しかけ、大平をホッとさせた。

本会議での議席では、綾部健太郎前運輸相をはさんで河野と大平がならんでいた。河野が議席に坐ると、大平はその前にまわって「どうもご心労をかけた」と頭を下げた。河野は「いやあ大平君、結構だよ。きょうは河野派は全部出てきているからね。みんな揃って「佐藤栄作」と書くから、君、安心せい」と答え、あとは綾部と何事もなかったかのように談笑をつづけた。

佐藤が無事、両院で首班に指名されたあと、大平はがんセンターの病室に戻った。前首相となった池田はテレビですべてを承知していたが、大平はこう話しかけた。

「あなたの政権の閉会式をどうお感じになりますかということ、お喜び申し上げます。きょうのハイライトは河野さんでした。河野さんならびに河野派がきょう、こういう措置に出ていなかったなら、この閉会式はとても血腥いものになっ

たかもしれません。われわれが感謝しなければならないのは、河野さんと河野派に対してではないでしょうか。政治というものは、政権をとることもいいかもしませんが、きょうの河野さんのふるまいは、大変な重みを持ったんじゃないでしょうか。」(自由民主党編『戦後政治の実像』)

池田は涙ぐんで聞いていたが、やがて大平が「十一月九日という日は、あなたにとっても、私にとっても生涯における最良の日ですね」と言うと、だまっとうなずいた。

大平は『春風秋雨』には、「十月二十五日より十一月九日に至るまでの二週間は、熱い湯桶に入っているように、永い緊張した歴史的時間であつた」と記し、また、のちに著した『私の履歴書』には、「それまでの二週間は、まことに長い長い二週間であつた。政権という得体の知れない妖怪が、その落ちつき先を求めて、平河町の自民党本部と築地のがんセンタ―との間で彷徨していたのである」と書いている。

政権という妖怪、少なくとも池田はその手から逃れることができたのである。